学校だより
9月
かわい
令和５年８月２８日
http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawai/

変幻自在に姿を変える

校長　窪田　剛久

この夏は連日熱中症警戒アラートが発出され、外にいることに苦痛を感じるような毎日でした。自分が子どもの頃、「勉強は午前中の涼しいうちに済ませましょう。」と学校から言われていた夏休みはもはや存在しません。エアコンの無い家で過ごしていたあの日々は、もう戻ってこないのかもしれません。日本に限らず数々の気候記録が更新されたこの夏、「地球は未知の領域に入った」と国連も警戒しています。7 月に入って、世界中で驚きの気温が確認されています。スペインで 44.5 度。昼間の屋外労働が禁止される地域も出ました。ギリシャでは 45.7 度。アテネの観光地で、従業員のストライキが起こりました。中国では 52.2 度。養豚場で豚 462 頭が熱中症で死んでしまったとのことです。アメリカでは 54 度。救助のヘリが暑さで飛べない事態となりました。英ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）の環境地理学者トーマス・スミス氏は、2023 年の夏について 10 年前に予測できていたかという質問に対し、気候モデルは長期的な傾向の予測は得意だが、向こう 10 年の予測は苦手だと答えました。「1990 年代のモデルは、現況をほぼ言い当てている。しかし次の 10 年がどうなるかを正確に知るのは非常に難しい。ただ、気温が下がることはないだろう。」と言っています。今後の展望は厳しそうです。今私たちの生活や経済活動に、大きな変化が求められています。

そうした中、横浜国立大学教育学部長　木村昌彦氏の講演を聞く機会がありました。木村氏によると、今は「プロティアン教育」が求められているそうです。『「プロティアン」という言葉の語源はギリシャ神話にでてくる、プロテウスの神を意味します。プロテウスは環境によっては火になり、水になり、時には獣にもと変幻自在に姿を変えるといわれています。21 世紀の社会では雇用制度、物事の価値観、科学技術のさらなる進歩等、多くの変化に直面しています。今回のコロナ感染危機によりパンデミックで時代が大きく変化する中、環境に応じて変幻自在に姿を変え、既存の教育体制、授業方法に捉われずに自らの教育方法は、自分で試行錯誤して獲得する気概とスキルが必要となってきています。　このことを体現するための考え方こそが「プロティアン教育」』だそうです。聞いていてなるほどと思いました。先ほどの地球温暖化に対しても私たちは危機感を高めつつ、試行錯誤して対応していかなければなりません。直面する大きな変化には変幻自在に対応し、迫りくる危機を乗り越えていく気概とスキルが求められています。各地では様々な研究者がすでに動き出しています。東北大学の南澤究特任教授を中心とした地球冷却微生物を探すプロジェクトや北海道大学の、牛のげっぷから温暖化を促進させるメタンガスを減少させる飼料の研究などもそうです。再生可能なエネルギーへの転換を加速させるだけでなく、様々な研究者が多角的視点からまさに変幻自在に、この温暖化問題解決に向けて取り組んでいます。こうした柔軟な発想や対応力を育てていくことが重要だと木村氏はおっしゃっていました。

毎年夏に開かれる「横浜市教育課程研究委員会　研究協議会」では「今はまさに教育の転換期である。これからは、自主的・自立的な学習者を育成していくことが求められており、そのためには、子どもたちを取り巻く学びの空間や時間の見直しを図るとともに、子ども自身が自分に合った学習の内容や方法を選択することのできる環境をつくっていくことが大切になる。そうしたカリキュラム・マネジメントの挑戦について共有しながら、これからの目指すべき方向性について考えていく。」としています。子ども自身が学びを選び取っていく、あるいはそういった主体性を獲得できるようにしていく、そうした方向に今教育は変化しようとしています。木村氏のおっしゃっていることに通じるものがあると思いました。川井小学校でも日々変化する状況に柔軟に対応しながら、新しい教育の実現に向けて試行錯誤し、挑戦を続けていきたいと思っています。